

2007年(平成19年)9月26日(水曜日)

子供の頃、佐渡島に居ながらにして世界を見させてくれる番組「兼高がおる世界の旅」が大好きでした。そんな影響もあってか、小学生の頃の将来の夢は、兼高さんのように世界を紹介するジャーナリストになることでした。



晴 | 雨 | 計

月日が経って大学に進学した私は、ジャーナリストとは程遠い「日本酒研究会」なるサークルに身を置くこととなりました。蔵元の生まれであると知った先輩一同に誘われるがまま入会したのです

が、大学二年で初挑戦した全国のおきき酒大会で特別賞を頂いたり、なかなかの蔵子ぶりに本人もまんざら悪い気もせず、そのまま日本酒酒びの四年間を過ごしていました。

にもかかわらず、大学を卒業すると私は、洋画配給会社に就職しました。

子供の頃の夢

広い世界の異文化体験ができる映画の世界が好きだったのです。その後およそ七年間、主にハリウッド映画の宣伝の仕事で充実した毎日を送っていました。

しかし、その時は突然やってきまし



た。「蔵へ戻ろう」。なぜか頭の中が子供の頃に遊んだ蔵のことで一杯になってしまったのです。

その時の決断をなんと言っているのやら。「責任感」かと問われることも多かったですが、正直なところ、「本能」と答える方が正しいと感じます。

後先考えず、とはまさに当時の状況。時はチューハイ人気の中、日本酒も造れは売れる時代はとくに去っていました。「なんとかなる」という根拠のない自信だけ持っていたような気がします。

そして蔵に戻って時が経ち、多少なりとも海外にもお酒を出すようになり、今、あらためて子供の頃に憧れた兼高がおるさんのことを思います。当時、日本人の海外渡航がそれほど自由でなかった時代、荷物に身を包み、美しい日本語を話す兼高さんは、世界を私たちに紹介しながら、実は世界に日本を紹介していたのだと。

広い世界と小さかった私の接点は、あの時旅番組から始まって、映画を経て今また日本酒という文化を通じてつながっています。子供の頃の夢は思わぬ形に進んでいます、当時の気持ちはず変わらず続いているのです。